

暦文協★01の活動も12年目、引き続きコロナ禍という制約はあるものの、オンラインとオフラインのハイブリッド形式でイベントを開催するという新たな方向性が見えた1年となりました。

<https://www.rekibunkyo.or.jp/>

●暦文協ミニフォーラム

まず、4月14日には北とびあにて暦文協ミニフォーラムを開催、リモートと会場あわせて約80名の参加をいただきました。トークセッション「ポストコロナカレンダーの行方、未来」では、最初に奥野卓司常任理事より問題提起をいただき、それにカレンダー業界の代表3名がパネリストとしてトークするという形で進行しました。

論点1 デジタル化の加速については、在宅勤務で家庭のカレンダーを使う機会が増えたという意見が出た一方、カスタマイズ・Webとの連動などデジタルならではの取り組みも紹介されました。論点2 働き方の多様化については、持ち運びできるタイプや省スペースな卓上タイプの需要が伸びているほか、高齢者には大きく書き込めるタイプが好まれ、日めくりは認知症対策にも役立つという紹介がありました。論点3 おうち時間の増加については、旅行気分が味わえる写真の需要が増え、絵柄重視の傾向が見られるそうです。論点4 環境意識の向上については、SDGsな用紙やインクの採用、コンパクト化による紙の削減や在庫調整などが進んでいるとのこと。

総じて、時代にあわせて変わりゆく面とともに、紙のカレンダーの持つ可能性も感じたひとときとなりました。



トークセッションの様子

●第12回総会&講演会

9月2日には東京大学弥生講堂一条ホールにて第12回総会&講演会を開催、リモートと会場あわせて約90名の参加をいただきました。

まずは東京都立大学名誉教授の渡邊欣雄さんから「沖縄の暦書とその文化」と題し、沖縄には中国から輸入した暦書(通書)や日本本土で作られた大雑書など、多様な文化の影響を受けてきた歴史があり、宮古島の砂川双紙・砂川暦や栗国島・与那国島・久米島の日取り帳のように、各地各様で統一性のない独自の暦文化が今も息づいている、といった講演をいただきました。

続くトークセッションでは、関東学院大学名誉教授の大越公平さんも交え、暦の収集保存、農山漁家の暦、ユンヂチ(閏月)などをテーマに、様々なトークが展開されました。

総会では、7月に逝去された新藤晴義さんに黙とうをささげたのち、事業・会計報告や今後の事業計画などが承認されています。新藤さんとは、ほんの数か月前まで暦文協オリジナルカレンダー制作でやり取りしており、突然の訃報でした。ご冥福をお祈り申し上げます。



渡邊欣雄名誉教授による講演



トークセッションの様子

★01 暦文協：一般社団法人 日本カレンダー暦文化振興協会の略称(国天ニュース 2011年10月号参照)

<https://www.rekibunkyo.or.jp/>

●新暦奉告参拝

恒例の12月3日カレンダーの日については、人数制限のうえ明治神宮にて新暦奉告参拝を開催、講演をライブ配信しました。

参拝は神楽殿前からの参進に始まり、直会殿にて修祓を受け、本殿にて参拝・玉串拝礼、その後神楽殿にて祈願の祈祷、巫女舞の奉納が執り行われました。

参拝の後は、早稲田大学名誉教授の伊東一郎さんから「ロシア・東欧の民間暦について」と題し、ロシア・東欧の民間暦は生業にまつわる行事とキリスト教の祭日で構成されるが、正教会ではユリウス暦が用いられているためカトリック圏とは日付が異なるといった概論から、実際の行事の様子に至るまで、写真や音声ときには歌声を交えながらじっくり解説いただきました。

続いて、中牧弘允理事長による「暦予報」では、令和5年が明治改暦150周年となることなどが紹介されました。

暦文協では、今後もさまざまな形で活動を続けていく予定です。



参進の様子



伊東一郎名誉教授による講演



中牧理事長による暦予報